第２回安全登山検討会の概要

１　日　　時　　平成 30 年８月 31 日（金）14：00～16：00
２　場　　所　　富山県民会館４階 701 会議室
３　出席委員　　検討会委員 17 名、オブザーバー 3 名

４　主な意見

（１）富山県内の山岳遭難の現状・課題と対応の視点

- 今シーズンもやはり単独登山や２人組登山が半分以上であった。単独登山で疲れて歩けないといってヘリの救助要請を受けたが、山小屋で１～２日休養させると元気になり自力で下山した。山小屋管理人の現地での的確な指導体制が重要である。
- 今年の 7/1～8/27 の遭難件数は 66 件、遭難者 69 名。(対前年 10 件増、15 名増)。やはり中高年者が多い。天候に恵まれ入山者の総量の増加、行動範囲の拡大、暑さによる注意力の低下が遭難の一因になったと推察する。

（２）取組みの現状･課題と今後の取組みの方向

【登山届】

- 登山届を出すことはﾘｽｸﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄの観点でも重要である。ｵﾝﾗｲﾝ登山届は大至急やる必要がある。
- ｲﾝﾀｰﾈｯﾄに縁のない方も多く登山しているので、そういった方の対策を考えておく必要がある。
- コンパスの利用を促進するためのｲﾝｾﾝﾃｨﾌﾞ企画については、山小屋としても協力する。
- 最新情報、実際歩いた人のコメントがＳＮＳで確認できるのは、非常によい判断材料になる。
- ｱﾙﾍﾟﾝﾙｰﾄの乗り物の中で登山届の提出のｱﾅｳﾝｽについては、運転手によっては行っている。
- 室堂ﾀｰﾐﾅﾙでの入山指導員による登山届の提出の呼びかけや、今年の春、立山駅の待ち時間に登山届の記入をお願いしていたのは有効である。
- 訪日外国人には、登山届の重要性、登山道の状況、必要な装備等、立山で登山するための情報をうまく伝えることが必要である。

【普及啓発活動】

- 国立登山研修所では、平成 22 年から韓国国立登山管理公団山岳安全センターと相互交流をしている。今年度は、韓国から来県があり、それぞれの登山の傾向や登山に関する情報提供の仕方、登山に関する文化や考え方の違いについて情報交換する。
- 登山愛好家の方に安全登山の情報を集約して発信することは、メーカーとしても重要と考えており、一般の方が山との接点を作る機会を増やして行きたい。
- 一般の登山者は、山の事故に関して想像ができない。遭難事故のニュースを見ても、最終的にどうなるかも解っていない。安全登山を声高に発信すべきである。
- 富山駅で安全登山に対する情報を提供することは、特に外国人向けには非常に有効だと思う。

【情報発信】

- 国際交流員や山岳関係者の意見から、新たにｻｲﾈｰｼﾞを整備するよりも、既存のﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞやアプリの充実を図り、災害時に避難行動を呼びかける効果的な方法を検討したほうが良いのではないかと考えている。
- 外国人は、事前にｲﾝﾀｰﾈｯﾄなどで調べて、分厚い印刷物を持ってくるが、Wi-Fi が整備されているところでは、常に次の場所の情報を調べている。
- 日本人も、ネットで調べているケースが多くなっているが、ネットを使わない高齢者もかなり山に来ており、山小屋で情報を求められることが多い。
- 登山者が自分のレベルを知ることが一番大切であり、そのレベルを判断する際の重要な指標となる「山のグレーディング」は、非常に重要である。

【登山指導体制】

- 山小屋までの時間を確認することで、その人の体力がわかり、その後の指導に参考となる。
- 一番聞かれるのは天気のこと。ネット情報だけでなく、現地での雲の流れ、気温などから情報を発信できるように勉強することも必要ではないか。
- ﾒｲﾝﾙｰﾄでないコースは、実際に歩いてきた登山者から情報を聞いておくことが山小屋の価値を高めている。

【登山道等整備】

- 天狗平での軽登山が可能な周遊性の高いハイキングコースの構築は、天狗口でのバス停の設置、乗車時の空席確保、安全を確保するための乗降場所の整備などの課題はあるが、当社としてもお客さんに利用していただくという意味では非常にありがたいことなので、前向きに検討していきたい。
- 安全面等を十分検討いただき、魅力あるハイキングコースの拡充・整備を前向きに進めていただきたい。

【通信環境の整備】

- 携帯電話が通じる･通じないで､遭難に対する救助要請が迅速に行えるかどうかという面はある。無理な所もあるが、通信可能範囲が広くなれば安全登山につながっていく。
- Wi-Fi や携帯での情報提供も必要だが、それですべてが片付くものではなく、対面での細かい指導が必要である。
- 外国人は携帯ではなく、Wi-Fi に期待しているところがあるので、Wi-Fi の場所を広げることは情報を伝える手段として有効である。

【山岳診療】

- 今年度の実績は、7/21～8/26 雷鳥沢診療所で 34 名、7/22～8/25 剱沢診療所で 34 名を受診。
- 遠隔診療についても、中長期的な目標になってくるが、モバイル機器を使っての遠隔診療を模索している。
- 十全山岳会は、立山山岳診療を全面的にﾊﾞｯｸｱｯﾌﾟしていくが、富山県内の医療機関と連携していく必要があると考えている。
- ドクターが常駐できる期間が限定される山岳地での医療行為は、限界がある中で山小屋の人に最低限の医療知識を講習するなど、さらに充実した医療体制が構築できればと考えている。
- ドクターがいないときは、山岳警備隊、遭対協の救急隊員、看護師の資格を持ったｱﾙﾊﾞｲﾄなどの応急手当が助かっている。救急法を知っている人がいると助かる。
- 山小屋では高山病が一番多く、緩和するための方法や体験談などをｱﾄﾞﾊﾞｲｽしている。

【救助体制】

- 10 月にヨーロッパ救助先進国への視察研修、電動式ﾊﾟﾜｰｱｯｾﾝﾀﾞｰの導入、山岳救助ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ制度の運用など、制度をさらに拡充し、さらなる迅速・的確な救助活動を展開したい。

【火山防災・火山ガス対策】

- 8/1 の火山防災協議会でﾊｻﾞｰﾄﾞﾏｯﾌﾟが承認され、噴火時の噴石から身を守る避難施設として山小屋の補強を支援している。今年度は雷鳥荘で実施する。
- 火山ガスは、ﾎﾟｰﾀﾙｻｲﾄを作成し、誰でも閲覧可能な状態になった。

【ﾘｽｸﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄの視点に基づく安全登山対策】

- 今回提示されている取組みで良いのではないか。
- 登山者は固定されていないので、漏れた人を減らすことが課題になってくる。